

(別紙様式3)

令和5年度あいちラーニング推進事業研究報告書

学校番号 1 2 2

学 校 名 愛知県立西尾高等学校

校長氏名 鈴木 雅文

研究責任者職・氏名		教諭・伊藤 公彦		事務担当者職・氏名		主事・鈴木 真秀	
研究 テーマ		観点別学習状況の評価を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進					
本年度の 研究目標		(1) 各教科の「指導と評価の一体化」に資する研究とする。 (2) 主体的・対話的で深い学びの視点から、生徒の「思考・判断・表現」の観点別学習状況の評価する場面を効果的に設計した授業改善を進める。 (3) 「学びに向かう力、人間性等」を育成する観点から、主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善の中で、「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価する。 (4) 先進校の主体的・対話的で深い学びの優れた実践を十分に活用しながら、「指導と評価の一体化」を目指す。					
研 究 の 実 施 内 容							
実施月日		内 容				備 考 (対象生徒等)	
6 月 14 日		教育課程委員会にて研究計画の概要を説明				教科主任	
7 月 4 日		I C Tに関する現職研修				全職員	
8 月 18 日		第1回西三東南地区連絡協議会 主管校および重点校の本年度の研究計画及び現状について情報交換				主管校・重点校 担当者	
10 月 13 日		重点校訪問【県立岡崎商業高校】				家庭科教員1名	
11 月 1 日		重点校訪問【県立一色高校】				数学科教員1名	
11 月 2 日		重点校訪問【県立岡崎東高校】				国語科教員1名	
11 月 10 日		公開授業及び研究協議会 8教科の公開授業及び研究協議会を実施				県立高校から 48名の参加者	
11 月 17 日		重点校訪問【県立幸田高校】				理科教員1名	
11 月 20 日		重点校訪問【県立鶴城丘高校】				英語科教員2名	
11 月 29 日		研究成果合同発表会にて成果発表				教務主任	

研究成果の評価及び普及・還元に関する実績

1 本年度の研究の概要

(1) 研究テーマ

本校の研究テーマは、昨年度に引き続き「観点別学習状況の評価を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進」とした。昨年度の取組の中で、観点別学習状況の評価の基本的な枠組みが整ったことを受けて、より適切な評価を実施すること、評価を視野に入れた授業改善をすることを目指し、各教科で取り組むこととした。

(2) 昨年度から継続の取組

初年度であった昨年度のうちに整えた枠組みのうち、2点について述べる。

まず、年度当初に各科目の学習指導マネジメントシートを作成する際、同時に生徒配付用の観点別評価規準を策定している。これは、生徒に学習のポイントを示すとともに、配付する書面を作成する中で教員側の観点別評価への意識が高まることも企図したものである。

次に、具体的な成績処理については、教務で作成した共通の Excel シートを共有し、これを用いて実施している。それぞれの評価項目の評価を入力すると、観点別評価を計算しスクールエンジンへ取り込みやすい形で表示される。各学期の評価を作成するシートと、各学期の評価を合わせて年間の確定評価を作成するシートの2種類を作成・共有している。これにより各教科で成績処理の際に生じるミスを減らすことにつながれていると考えられる。

以上の2点については今年度も引き続き実施しており、来年度以降も継続していく。

(3) ICT 機器の使用状況

本校の授業で汎用的に最もよく使われているアプリケーションは、ロイロノートである。授業の中の利用法として、主に提出箱や共有ノートを用いて生徒の取り組んだノートを写真に撮らせて提出させたり、英作文などの提出物を添削して返却させたりという形で活用している。また、探究的な活動のまとめをする際の発表スライドの作成、シンキングツールを用いた協働的な学習などといった形で、それぞれの教員が工夫をしながら活用する様子もみられる。生徒への単純な連絡ツールとしての利用も含め、学校全体として利用が一般化している。

(4) 2学期制

今年度の新たな動きとして、前後期の2学期制をとることとした。これは、考査と評価の回数を減らし、その分長い期間をとってじっくり評価するために実施したものである。下のよう、今年度の定期考査は4回とした。

前期中間考査 6月15日(木)～ 6月21日(水)

前期期末考査 9月28日(木)～10月 4日(水)

後期中間考査 11月29日(水)～12月 5日(火)

後期期末考査 2月15日(木)～ 2月21日(水) ※1, 2年生のみ

実際に実施してみると、ねらい通りじっくり評価をする時間をとることができたため、ルーブリックを用いて生徒の活動を評価するなど、観点別評価の取組が進む教科もあった。また、評価の回数が減ったことは、評価に伴う教員の負担感の低減にも寄与したと考えられる。だがその一方で教科によっては、考査が少ないことにより、考査範囲が広くなりすぎてしまう、考査を用いて考査ごとに学習内容を定着させることがしにくくなるという不安を感じる教科もあり、そのような教科では定期考査とは別に授業の中でこまめにテストを行うことで学習内容の定着を図った。

2 公開授業における実践

(1) 公開授業の概要

ア 日程

令和5年11月10日（金）

12:40～13:00 受付
13:00～13:15 全体会
13:20～14:10 研究授業①
14:20～15:10 研究授業②
15:20～16:10 研究協議

イ 研究授業

全8教科で研究授業を実施した。

研究授業①

教科	授業担当者	科目名	クラス	実施場所
国語	石川 彩	言語文化	1年7組	1年7組教室
公民	尾崎 安子	公共	2年3組	2年3組教室
数学	沖田 昌大	数学Ⅱ	2年1・2組	第1多目的教室
理科	森口 博子	生物基礎	1年9組	1年9組教室
英語	平井 友紀子	英語コミュニケーションⅠ	1年6組	1年6組教室

研究授業②

教科	授業担当者	科目名	クラス	実施場所
国語	今井 智子 川本 浩太郎	文学国語	2年1・2組	書道教室
情報	神谷 泰之	情報Ⅰ	2年5組	コンピュータ教室
保健体育	山口 美有	保健	1年8組	1年8組教室
家庭	深津 素子	家庭基礎	1年7組	1年7組教室

ウ 助言者

国語 総合教育センター 相談部 教育相談研究室 研究指導主事 水野 司麻 先生
地歴公民 総合教育センター 研究部 教科研究室 研究指導主事 渡邊 芳隆 先生
数学 高等学校教育課 教科・定通指導グループ 指導主事 渡辺 純 先生

エ 参加者

県立高校教員 48名

(2) 国語科の実践①

1年生 言語文化 安部公房「良識派」

ア 目的

- (ア) 対話を通して、学びを深める。
(イ) 文学的文章を、作品と実社会と結びつけて読む経験をするともに、「文学探究」に向けさまざまな読み方を知る第一歩とする。

イ 研究準備および方法

(ア) 事前準備

前段階として、「羅生門」の授業において、「今昔物語集」との読み比べ課題に、話し合い活動を通して取り組ませた。終了後、「話し合い活動が自身の学びが深まったか」というアンケートを実施し、他者の意見を知り、自分の意見を考え直したり他の意見と比べた

りすることを通して、自分の意見が変化したり内容に納得できるようになったりするという点に「学びの深まり」を感じている生徒が多いことが分かり、対話的な活動が文学作品を読み深めるために有意であることを確認した。

(イ) 方法

本單元では、講義形式の読解を省略し、生徒自身で作品に向かわせることで、能動的に作品と対峙する機会とした。より多くの意見に触れることで自身の考えを深められるよう、話し合い活動はジグソー方式を用いた。

(ウ) 言語活動

作品の寓意を読み取り、実社会の現象と結びつけて小説を読み深める活動。

ウ 展開

- ① 登場する「ニワトリ」を分類し、一つを選択させる。
- ② 選択した「ニワトリ」別に編成された班で意見をまとめたあと、班を再編成し、異なる「ニワトリ」についての意見を共有する。
- ③ 「人間社会と風刺として、何を表しているか。」について、各自でレポートを書く。
- ④ 「ニワトリ」別の班でレポートを批評し合い、その後、得た意見を吟味する（吟味とは、メモした意見を「影響を受けた意見」、「自分と同意見」、「自分とは異なる考え」、「（本文にもとづく）これは違うなという意見」に分類する。）。
- ⑤ 自分の意見を練り直し、レポートを完成させる。

エ 結果

(ア) 取組のようす

クラス全体での読み取りを行わないことに戸惑う生徒もいたが、意見を交わし合ううちに作品への興味が増し、自分の意見をもつことができるようになった生徒が多くいた。黒板に板書される「正解」がないことへの不安も徐々に解消され、自信をもって発言する様子が見られた。ジグソー方式を取ったことで、他の「ニワトリ」を中心とした解釈を知り新たな気づきを得た班もあった。

(イ) 言語活動について

評価

作品の内容を正しく把握し、自身が捉えた寓意と合致するような具体的場面を述べられているかという「内容点」と、話し合いの記録をとっていたか、多数の意見について吟味できているか、話し合いを活かしてレポートを加筆修正できているかという「吟味点」に分けて評価した。

取組状況

多くの生徒が話し合いの結果、本文や自身の考えにもとづいて得られた意見の吟味ができており、単に他者の意見を取り入れるだけでなく、「本文の内容と不一致である」ということを根拠に他者の意見に異を唱えることもできていた。また、実社会における場面についても、歴史的事象や現代の社会問題から身近な学校内での一場面まで、さまざまな具体例があげられ、その根拠となる本文の読み取りも的確であるものが多数であった。

オ 考察

- (ア) 話し合い活動は、指導者が助言を要する場面もありはしたが、全体的に生徒のみで活発に進めることができた。また、他者の意見に対して、本文に基づいて「それは違う」と反論（否定）したり、「どうして？」と問いかけたりすることができる生徒もいた。直接反論ができない生徒でも、意見の吟味（上記ウ-④）においては、ワークシート上で他者の意見を批評することができていた。

レポートの内容からも、生徒のみによる読み取りに極端な誤読はないことが確認できており、加筆修正後のレポートが1回目のものよりも、より適切な具体例、より明確な根拠の提示となっているものが多かった。もちろん、生徒間で比較すれば読み深め具合や考えの深まりに差はあるが、個々の生徒として評価をしても、その生徒なりに内容はよくなっている。対話を通して学びを深めることができていたと考える。

- (イ) 生徒たちは、話し合いを通してさまざまな具体例に気づき、作品を、自分の身から遠い存在ではなく、自分自身に引き寄せて読むという経験を楽しんでいたように見受ける。次年度、文学国語を学ぶにあたり、本文にもとづいてストーリーや登場人物の心情をただ読み取るだけでなく、時代背景や作者の生い立ち、あるいはその後の作品に与えた影響など、多面的視点で文学作品を読み、楽しむための第一歩となったのではないかと考える。

しかしながら、本教材は短編小説であり、難解な語句もほとんどなかったが、文章量が多い、文語的表現が多用されている、生徒自身の生活や価値観と乖離が大きいなど、多種多様な文学作品に対応できるだけの語彙力や読書量は、今の生徒にはない。語句や表現の知識の定着を図るとともに、多様な意見や価値観に触れる機会を設け、広い視点で文学作品を読み深められる力を養成したい。

(3) 国語科の実践②

2年生 文学国語 夏目漱石『ころ』

ア 目的

1年次の学びを踏まえて、本文を通じて自分が見つけた疑問点について考察し、グループ発表をすること等を通じて、作品を多面的視点から読み、理解を深める。

イ 準備

(ア) 授業準備

提示された4つのテーマ(「先生とK」「先生とお嬢さん」「先生と書生」「先生と明治時代」)の中から生徒自身が深めたいテーマを第2希望まで選び、同じテーマを選んだグループ(「グループA」とする)を構成した。発表は異なるテーマを選んだ生徒もいるグループ(「グループB」とする)の中で行うことを伝えた上で、グループAで、発表準備として、4時間の活動を実施した。その際、作品関連の書物なども参考資料として提示した。

(イ) 課題

追究したい疑問点を考え、ロイロノートで発表できるように準備する。

ウ 方法

4人程度からなるグループBで、順番に発表を行う。発表を聞く生徒は、「コメントシート」に「良かった点」と「疑問に思った点」を書く。尚、研究授業では、グループ発表を扱ったが、発表後には、「再びグループAに戻り、発表を通じて出てきた疑問点を共有し、さらなる考察をし、レポートを書く」という活動を実施した。

以下が評価基準である。

(ア) グループBで発表する

- A：根拠を挙げた上で、自身の解釈をさまざまな視点から述べる事ができた。
- B：根拠を挙げた上で、自身の解釈を述べる事ができた。
- C：自身の解釈を述べる事ができた。

(イ) 「コメントシート」を書く

- A：「疑問に思った点」も、根拠をもって書く事ができた。
- B：「疑問に思った点」も、書く事ができた。
- C：「良かった点」を書く事ができた。

(ウ) レポートを書く

A：根拠を挙げた上で、自身の解釈をさまざまな視点から述べる事ができた。

B：根拠を挙げた上で、自身の解釈を述べる事ができた。

C：自身の解釈を述べる事ができた。

エ 結果

発表を意欲的に行う生徒がほとんどであった。また、グループワーク、発表という段階をふんだことで、単元の最後でレポートを書くのに困る生徒も見受けられなかった。一方で、発表を聞く生徒が、発表から新たな疑問を抱くという傾向はそれほどなかった。

オ 考察

(ア) 生徒は事前準備から積極的に活動に参加し、意欲的に授業に取り組む事ができた。

解釈する際、本文から根拠とする点を強調しすぎるあまり、画一的な解釈であふれてしまうことを懸念していたが、1つの記述からさまざまな解釈を考えた生徒も少なからずいた。

(イ) 他人の発表を聞いた後に、「疑問に思った点」を書く生徒が少なかった。疑問点を共有することは、発表する側も聞く側もこれまでなかった視点を獲得することにつながっていくと思われる。今後の活動でも、批判的視点からも物事を捉えることの大切さを伝えていきたいと感じた。

(4) 地歴公民科の実践

2年生 公共 防犯カメラの設置とプライバシー

ア 目的

(ア) 法や規範の意義及び役割に関わる現実社会の事柄や課題を基に、憲法の下、適正な手続きに則り、法や規範に基づいて各人の意見や利害を公平・公正に調整し、個人や社会の紛争を調停、解決することなどを通して、権利や自由が保障、実現され、社会の秩序が形成、維持されていくことについて理解する。

(イ) 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付ける。

(ウ) 法に関わる事項について、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したことを、論拠をもって表現する。

(エ) 現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養う。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

前：人権保障に広がり公共の福祉について学習した。

後：前時に作成した提出資料のうち、評価Aとなる資料を用いて授業を展開した。

(イ) 準備したもの

授業プリント、ワークシート1枚

(ウ) 実施方法

教室に防犯カメラを設置することの是非について考察と話し合いをさせ、まとめた。

ウ 結果

(ア) 教室に防犯カメラを設置するメリット、デメリットについて考察をし、個人の意見としては賛成意見が3割程度いたが、グループで話し合った結果、全グループで反対意見にまとまった。

(イ) いじめを防止するための議論に傾きがちで、公共の福祉の観点からの考察が不十分だった。

(ウ) 評価場面における評価は（ワークシート(5)）は、A20%、B70%、C10%とした。B評価の生徒は、プライバシーの権利や幸福追求権など既習事項を活用して自分の意見をまとめていた。A評価の生徒は、B評価の意見に加え、公共の福祉の観点からより深く考察していた。

A評価とした例：

- ・どんな人にも等しく人権はあり、いじめを防止するためにカメラを設置したとしても、その際プライバシーの侵害や肖像権に関するトラブルによって侵される人権が増える可能性がある。個人情報完全に保護することが難しいため、カメラを設置するのは反対だ。いじめ防止の対策は別の方法で行えばよい。
- ・私はみんなの意見を聞いた上で、やはりカメラの設置に賛成です。プライバシー権やインターネット、情報機器の問題は最近特に重要になっていますが、今でも個人が尊重されて傷つけられない権利も、もちろんあると思います。自由があるからといって、他人を傷つけることは許されません。反対する人には、カメラの情報にアクセスできる人を限定して、個人情報を保護すればいいと思います。

エ 考察

(ア) 生徒は積極的に活動に参加し、前時までの授業内容を活かして考察することができた。しかし、話し合いの中で強い意見を述べる生徒に影響されすぎて、最初に個人で考察した内容を十分に活かしたまとめにならなかった生徒も見受けられた。今回のような正解のない答えに対して、多様な意見がもっと多く皆の前に出てくる授業を工夫したい。

(イ) 生徒の公共の福祉に対する捉え方があいまいで、想定した評価基準に到達させるのが難しかった。授業実践での反省を通じて、評価基準を変えていき、よりよい評価をしていきたい。

(5) 数学科の実践

2年生 数学Ⅱ 微分法と積分法

ア 目的

問題を自ら作成することによって、3次関数のグラフに注意点に気づくとともに過去に学んだグラフの特徴を復習させる。

イ 準備

(ア) 授業準備

前の授業でグラフが描けるソフト「Desmos」の使い方を確認した。

(イ) 課題

事前に描きたい絵を考えてくる。

ウ 方法

3次関数を用いてグラフを描き、その際に用いた関数を問題にし、ロイロノートで提出させる。その後隣の生徒が作成した問題を解きあう。

以下が評価基準である。

(ア) 各自考えてきた内容

A：ルールを守って作成し、様々な関数を組み合わせて作成できた。

B：ルールを守って関数を作成できた。

C：ルール守って関数を作成できなかった。

(イ) ペア活動

A：ICT 機器の活用とペアでの活動の結果、事前に考えた関数よりも特徴的なものを作成することができた。

B：ICT 機器を活用し、より良い関数を作成することができた。

C：ICT 機器の活用とペアでの活動を十分に行うことができなかった。

(ウ) 問題を解く

A：時間内に自力で解くことができた。

B：友人に助けをもらいながら解くことができた。

C：時間内に解くことができなかった。

エ 結果

生徒全員が課題を行ってきて、さまざまな意見が出る授業となったが、自分が描きたい絵に固執するあまり計算が煩雑になってしまう生徒もいた。

オ 考察

(ア) 生徒は事前準備から積極的に活動に参加し、意欲的に授業に取り組むことができた。各自スマートフォンを利用してもできるグラフ作成ソフトを用いて授業を行うことで、自らの疑問を自ら解決する方法を提示できたと考える。

(イ) デジタル機器を使用する際は、その目的を明確にしておかないと効果が薄れてしまう。好奇心からルールを逸脱してしまう生徒もいたため、ルール設定をした理由をしっかりと説明し、深く考えようとする生徒の気持ちを尊重しながら、教員側が指導していくことが大切だと改めて感じた。

(6) 理科の実践

1 年生 生物基礎 内分泌系による情報伝達と調節

ア 目的

(ア) 生物の体内環境の維持について観察、実験などを通して探究し、生物には体内環境を維持する仕組みがあることを理解させ、体内環境の維持と健康との関係について認識させる。

(イ) 生物の体内環境の維持に関する探究活動を行い、学習内容の理解を深めるとともに、生物学的に探究する能力を高める。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

前：自律神経系・内分泌系による情報伝達と調節について学習した。内分泌系については、内分泌腺・ホルモン・おもな働きを学習するのみで、具体的な調節の仕組みまで学習していない。

後：前時に作成した提出資料のうち、評価 A となる資料を用いて授業を展開した。また、前時より具体的な調節の仕組みの学習をした。

(イ) 準備したもの

生徒用タブレット、教員用タブレット、プロジェクタ、スクリーン

(ウ) 実施方法

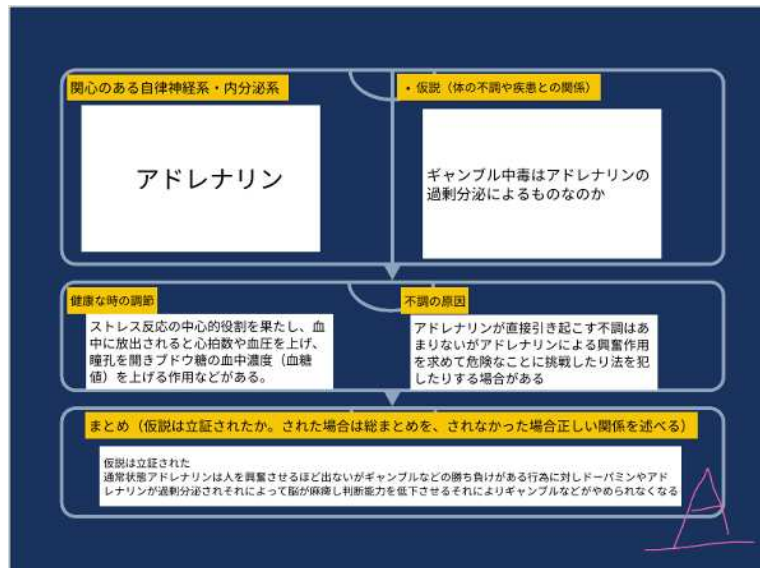
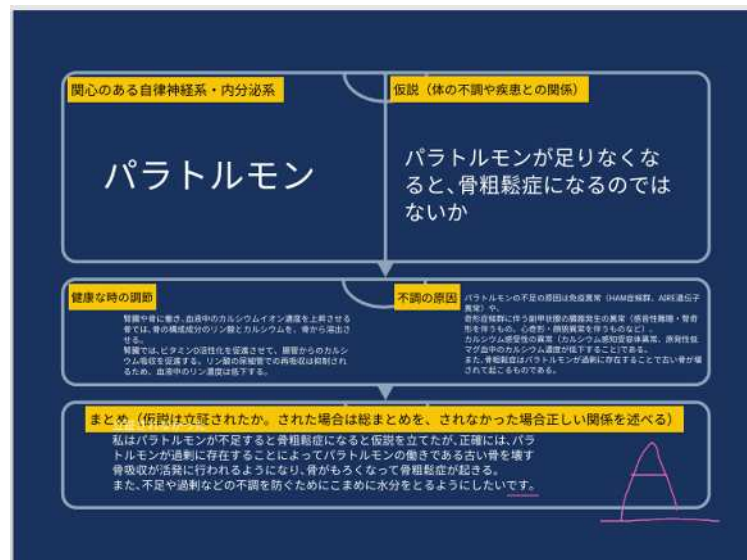
体の不調や疾患と自律神経系・内分泌系が関係することについて仮説を立て、ロイロノートの情報分析チャートを活用して納得できる理由をもとに提出資料を作成させた。教科書に記載の自律神経系・内分泌系であればどれを課題としてもよいこととした。

ウ 結果

(ア) 8 割程の生徒が教員の期待どおり、また期待以上の成果をあげることができた。

- (イ) 「ただ暗記する」学びから脱却することができた。自身の不調やよく耳にする疾患の原因を自身で探りつつ、これまでの学びを結びつけて立てた仮設が真か偽かを自身で判断し、情報分析チャートに表現することができた。
- (ウ) 一方で、指示外の自律神経系・内分泌系を選ぶ生徒が2名おり、前提条件（教科書に記載の物から選ぶ）を丁寧に確認する必要がある生徒もいることが判明した。

A評価とした例



エ 考察

- (ア) 生徒は積極的に活動に参加し、本時における期待した成果をあげることができた。前時までの授業内容を考察の際に使用し、体の不調や疾患の原因を深く追究することができた。また、発表とその準備を通して科学系レポートの作成技能を身につけることができた。今回の実践では、探究型学習の授業実践ができたと考える。
- (イ) 提出資料を評価するためには、教師の知識が課題となる。教師自身が日頃より自己研鑽し、新しいかつ真偽の確かな情報をアンテナ高く掴んでいく必要がある。

(7) 保健体育科の実践

1 年生 単元 1 現代社会と健康 17 性感染症・エイズとその予防

ア 目的

エイズ及び性感染症について、その原因、及び予防のための個人の行動選択や社会の対策について発言したり、書き出したりできるようにする。

現代の感染症とその予防について、課題の解決に向けた学習に主体的に取り組むことができるようにする。

イ 準備

(ア) 授業方法

毎時間タブレットを用いて、ロイロノートで授業を展開している。また、ロイロノートを利用し、クイズを行いたいため事前にクイズの実施方法を説明した。

(イ) 準備したもの

生徒用タブレット、教科書、図説、教員用タブレット、プロジェクタ、スクリーン

ウ 結果

(ア) 「医師や電話相談窓口に身体症状を伝えるだけでH I Vに感染しているか診断してもらえる」という問題では正解者 24 人 (63%)、不正解者 14 人 (37%) であった。また、「蚊やダニからH I Vに感染することがある」という問題では正解者 15 人 (39%)、不正解者 23 人 (61%) であった。

(イ) 生徒用タブレットとロイロノートを用いて、スライドの空欄に正解を埋めて、知識を深めることができた。その方法は、タッチペンで記入する者もいれば、キーボードで打ち込む者もあり多様な使い方をしていた。

エ 考察

(ア) クイズの正答率を見ると、唾液や空気感染によって性感染症やH I Vに感染することはないという正しい知識をもっている生徒が 100%に近い値でいることが分かった。しかし、蚊やダニを媒介して感染する、電話で相談のみでH I Vに感染しているか診断結果が出るという間違った知識をもつ生徒も多くいることが分かった。また、少量の血液検査を実施しなければH I Vに感染しているか診断できないということも含め、授業の中で正しい知識を伝えていくことが大切であると感じた。さらに、病院だけでなく保健所でも無料かつ匿名でH I Vの検査を受けられるということを授業の中で強調して伝えていくべきだと考える。

(イ) 生徒用タブレットを使用する際は、その目的を明確にしておかないと効果が薄れてしまう。加えて、ワークシートをタブレットで記入させているため、毎時間記入したスライドをロイロノートで提出させ、指導者の目で確認し、生徒のフィードバックを充実させることで理解を深める必要があると思った。保健の授業においても、指導と評価の一体化をより大切に指導していかなければならないと改めて感じた。授業の目的である「エイズ及び性感染症について、その原因、及び予防のための個人の行動選択や社会の対策について発言したり、書き出したりできるようにする。」では、生徒が個人の行動選択や社会の対策について論理立てて考え、発言できるよう発問することやワークシートを授業時間内に提出させることで、「書く」ことを促すようにしていくとより当該単元の理解が深まると考えた。

(8) 英語科の実践

1 年生 コミュニケーション英語 I ディベート

ア 目的

- (ア) 現代のファッション業界の問題と、それに対する異なる立場の主張をレポートにまとめる。
- (イ) 安価なTシャツに関するミニ・ディベートをすることができる。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

- ・現代のファッション業界の問題と、それに対する異なる立場の主張をロイロノートで提出した。
- ・肯定派、反対派それぞれの意見をロイロノート上で共有し、自分たちで使いやすいようにカスタマイズした。
- ・評価表をあらかじめクラスに提示し、評価の観点を共有した。
- ・なお、論理表現 I のパフォーマンステストとして7月にディベート、11 月にディスカッションを生徒たちは経験している。

(イ) 準備したもの

ワークシート、単語表、ロイロノート、アンケート

(ウ) 実施方法

- ・“We should stop buying inexpensive T shirts made in Bangladesh” について1対1でディベートを行った。生徒番号の偶数奇数によりクラスを2分し、1時間で行った。
- ・肯定側否定側どちらの立場になるか、また誰と当たるかは直前のくじにて決めた。
- ・ディベートの順番は肯定側主張1分、反対側主張1分、肯定側反駁30秒、反対側反駁30秒で行い、休憩はなしとした。
- ・ディベートの際は紙媒体と筆記具のみ持ち込み可能とした。
- ・評価については ALT に入ってもらい、評価表を基に採点を行った。勝敗については残った生徒でディベートを見て、ジャッジを行った。

Evaluation Sheet for debate (December)				
English Communication I				
evaluation factors	criteria	A	B	C
debate	☐ persuasiveness	5		
	☐ ideas from different perspective		3	
	☐ rebut			1
English	☐ vocabulary / pronunciation / grammar	5		
	☐ procedure (intro / opinion+reason /		3	
	☐ coherence			1
Attitude	☐ eye contact	5		
	☐ loudness		3	
	☐ time management			1
1- ()No.()Name(			win pro	lose con

ウ 結果

- (ア) 教科書の内容が肯定側擁護に偏っており、授業で否定側の情報を多めに入れたところ、生徒の意見は否定側擁護へと大きく偏ってしまった (35:5)。
- (イ) 項目「rebut」において” you said がない反駁は不可” と明言した。これにより明確な違いが表れた。
- (ウ) 主張については、生徒はよく練習してきておりその内容もよかった。しかし、聴衆の共感を生むことまで意識がいかず、準備してきた紙から視線を外せなかったり、抑揚がなかったりなど読むことで精一杯で説得力に結びつかない者もいた。

- (エ) 評価表については、凡そできていれば該当項目にチェックを打ち、その数で判別できるよう、機械的に処理できるようにした。生徒に任せた勝敗結果は今回点数化していない。

エ 考察

- (ア) 意見共有の段階で、生徒は否定側擁護へと大きく偏っていたため、ディベートでは肯定側の劣勢かと考えられたが、これを踏まえて事前に意見を考えた生徒が多数出てきた。
- (イ) 項目「rebutel」の成功の決め手は、相手の意見をきちんと聞くこと、その要点を理解し、即座に疑問点を投げかけることの3段階に分けられ、難易度も高い。
- (ウ) 項目「attitude」で成功している者は、教員のアドバイスに従いあらかじめ反駁内容を想定し準備してきた者、練習過程のビデオを撮り自己分析するなど対応を行った者などがいた。もとより人前での発表を得意とする者などの例外もあるが、タスクについて余裕があるかないかの生徒が持つ英語力の差を可視化する項目となった。
- (エ) アンケートを見ると、評価表を事前に共有することで、その項目に絞って生徒は練習してきたようだ。それ故に「できた」ことがわかりやすく体感できて、自己評価も高くなった。また自分ができなかったことができていた生徒を評価し、次の自分のロールモデルとしている生徒も多かった。また点数化はしていないが生徒によるジャッジも、自信を与える役割があったようだ。求められていることを理解した上で、あらゆることを想定し対応をしてきた者は評価が高かった。

(9) 家庭科の実践

1 年生 家庭基礎

ア 目的

- (ア) 生涯発達の視点で青年期の課題を理解している乳幼児期の心身の発達と生活について理解する。
- (イ) 親の役割と保育について理解している命に対する責任や、社会の一員として次世代を育む責任を理解する。
- (ウ) 子供を取り巻く社会環境について理解し、子どもが健やかに育つ社会をどのように実現すればよいか、考え実践することができる。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

前:命に対する責任や性的自立について学習し、子どもの子育てに対する理解を深めた。

実習として年齢別絵本製作(グループ発表)、子どものおやつ(クッキー)作り。

後:前時のアンケート結果に基づく考察と単元ふりかえりポートフォリオの発表。

(イ) 授業準備

生徒用タブレット、教員用タブレット、プロジェクタ、スクリーン、学習ノート
本時内容パワーポイント、育児休業取得者動画、「マララのまほうのえんぴつ」絵本

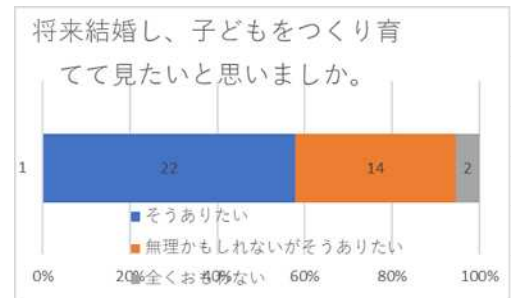
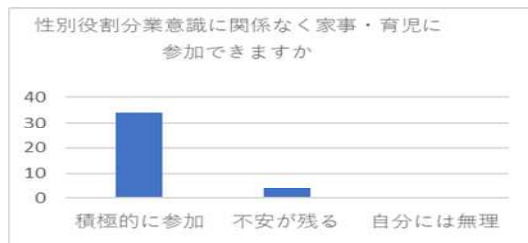
(ウ) 実施方法

前時の内容の復習を行いながら、現代の子育て環境における問題点の提起。またその改善策。社会全体での取り組みについて確認。男性育児休業取得当事者からの動画から感じたことを発表。親としての責任や取り巻く社会的問題(虐待の現状)、子どもの貧困問題について考える。自分自身に置き換え将来どのような親になりたいか考え、振り返りシートに記入。単元後に振り返りアンケート実施。

ウ 結果（在籍38人）

(ア) 将来結婚し、子どもをつくり育ててみたいと思いましたか。

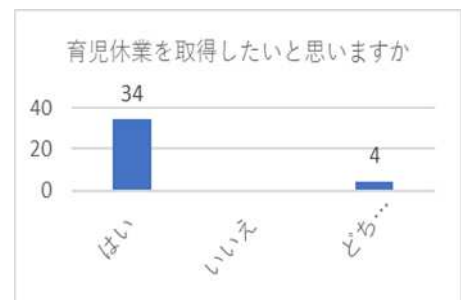
(イ) 将来あなたは、性別役割分業意識に関係なく家事・育児に参加しますか。



(ウ) あなたは育児休業取得しようと思いましたか。

(エ) 社会問題を含め、子どもの貧困問題について理解できましたか。

100%（38名）が理解できたとの回答。



A評価とした例

- ・前時までの内容を含め、実習・製作（年齢にふさわしい絵本）に積極的に参加できる。
- ・青年期の発達課題を理解し、子どもの発達の特徴を理解し、親としての責任を理解することができる。
- ・社会的問題の解決にむけて広い視野での意見を述べ、社会の一員として実践しようと努力することができる。

オ 考察

- (ア) 製作作品、実習態度等を細かく評価していくことで、座学のための授業とは異なる個々の生徒の能力を評価することが可能となった。
- (イ) 教科書のみの授業ではなく、ICTを活用することによって広い視野で物事を考え、問題解決に向けて他の意見を参考にし、思考を深めることができる。
- (ウ) 家庭基礎の場合1年間で多種多様なカリキュラムを完結させなくてはならない。限られた時間内で予定をしていても伝えきれない内容もあり常に授業研究は必要。

(10) 情報科の実践

2年生 情報Ⅰ 問題解決とその方法

ア 目的

表計算ソフトの機能を活用しガチャのシミュレーションを行った後に、シミュレーション結果から分析を行い、ガチャの確率は設定どおりなのかを述べることができる。

イ 研究準備及び方法

(ア) 授業準備

4時間前の授業から授業内で、表計算ソフトを活用したシミュレーションの実行及び、データ分析の練習をさせた。

(イ) シミュレーション結果の共有

ロイロノート上で提出箱への提出の練習を行わせ、データ共有方法の確認をした。

(ウ) 準備したもの

授業の流れを説明するためのパワーポイント、ワークシート(PDF ファイルをロイロノート上の教員用フォルダに入れ、授業内で生徒各個人に配布)、データ分析用ファイル(コンピューター室の生徒用 PC からアクセス可能な生徒個人用フォルダに保存)、生徒のスマートフォンまたはタブレット

ウ 方法

授業中にまず生徒にシミュレーション方法を考えさせ、シミュレーションを行った後に生徒間で結果共有させ、共有したデータを活用しグラフの作図を行い、分析と考察をさせる。

以下が評価規準である。

「思考・判断力・表現力」の評価

- A データを活用しグラフを作成でき、分析結果を述べることができるだけでなく、ガチャに対する人間の行動心理まで述べている。
- B データを活用しグラフを作成でき、分析結果を述べることができる。
- C データを活用しグラフを作成できる。

エ 結果

(ア) 授業準備

練習の結果、ロイロノート上でのシミュレーション結果の共有はスムーズに全員出来るようになった。

(イ) グラフの作成

シミュレーションの実行、共有したデータの入力や処理がスムーズに出来ず、授業時間内にグラフの作成に至る生徒がいなかった。

オ 考察

- (ア) 評価基準のグラフ作成ができなかった部分については、授業準備の段階でデータ入力や処理をスムーズに行えるように、実技時間の調整が必要だと感じた。
- (イ) シミュレーション方法を生徒に考えさせた点はよかったが、制約を取り除きテーマのみを与え、問題解決の段階によつての評価基準やシミュレーション方法の発想を評価基準に盛り込むなど、来年度以降も研究を続けていくと面白いと感じた。

3 まとめ

この2年間を通じて、あいちラーニング推進事業の研究として授業改善に取り組む中で、生徒が協働的な探究活動をする授業をつくることができた。今後、令和8年度に併設中学校が開校し、探究学習重視型の中高一貫校として生まれ変わっていかなければならないことを考えればまだまだ途上ではあるが、授業改善の第一歩をしるすことはできたと考えられる。

教員・生徒の意識の変化を感じられる資料を2種類示す。まず、令和4年度と令和5年度のそれぞれの観点の評価でのABCの分布をまとめたものが右のグラフである。令和4年度は1年生のみ、令和5年度は1, 2年生のため単純な比較はできないが、ここでは主体的に学習に取り組む態度の評価の変化に注目したい。令和4年度は主体的に学習に取り組む態度についてはA

令和4年度

知識・技能



A B C

思考・判断・表現



A B C

主体的に学習に取り組む態度



A B C

令和5年度

知識・技能



A B C

思考・判断・表現



A B C

主体的に学習に取り組む態度



A B C

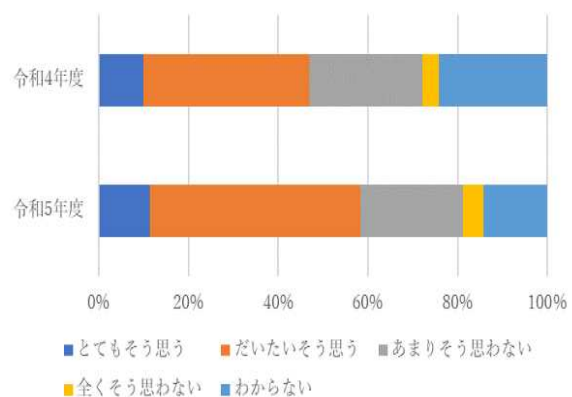
評価が9割を占めていたが、令和5年度はやや分散するようになっており、これは従来の「成績を底上げするための平常点」という意識ではなく、この観点についても適切に評価しようという意識が少しずつ教員の間に広がりつつあることを表しているのではないかと考えられる。

生徒の意識はどうだろうか。昨年度の報告書でも示した生徒アンケートの結果の、その後の推移は右のグラフの通りである。

「とてもそう思う」「だいたいそう思う」という肯定的な回答が昨年度よりも増えており、学校の観点別評価に対する生徒の認識は昨年より高まっていることがわかる。

このように、校内の授業改善の気運は高まりつつあるが、教科によっては、まだ一部の教員の取組にとどまっている部分もある。今回得られた成果を学校全体の取組に広げていくことは今後の課題であり、あいちラーニング推進事業主管校としての2年間を終えた後も継続して取り組んでいく必要があると考えている。

西尾高校は、観点別評価を意識した授業を行っている。



※ 本研究報告書は、令和6年3月22日までに県教育委員会に提出する。